令和５年　２月　２　日

丸　山　雅　子

近代日本の先駆者　小栗上野介忠順

１．はじめに

日本の近代化は薩長を中心とした明治政府により突如として始まった。そう思われている方も多いのではないでしょうか。、幕臣は時代遅れの無能な集団で、弱腰で結ばれた不平等な日米修好通商条約を改正するために、いかに明治政府は苦労したかと。

しかし幕府はペリー来航以来、国を開いて外国の諸制度、技術を取り入れ近代化を進めた。それに対し攘夷を唱え足を引っ張ったのが朝廷や薩長であった。日米修好通商条約にしても現在では幕府の外交手腕が再評価されつつある。

幕末のテクノクラートと言われる川路聖謨（としあきら）、岩瀬忠震（ただなり）、水野忠徳、小栗忠順（ただまさ）らに代表される幕臣たちは薩長の武士よりもはるかに見識があり、国際感覚を持った有能な人物が多かったのである。

その中の一人、小栗忠順（ただまさ）、彼は日米修好通商条約批准のため遣米使節団の目付に抜擢されアメリカに渡る。そこで見た先進技術や制度に触れ、日本の近代化の必要性を痛感した。帰国後、幕府に進言して建設した横須賀製鉄所(造船所)は近代工業の礎になった。また日本で初めての株式会社「兵庫商社」を作り貿易の拡大や商取引の活性化を目指し、将来ガス灯、郵便や電信、鉄道の設置も発案していた。破綻寸前の幕府の財政の立て直しに奔走した。フランス語学校の設立、軍隊の近代化にも努めた。幕藩体制をかえて郡県制にして徳川家を中心とした大統領制を構想していた。

しかし残念ながら小栗の功績はほとんど評価されていない。それは逆賊として西軍に斬首されたことにもよるが、明治政府の薩長史観による学校教育がいまだに引き継がれているところが大きい。今一度、小栗の功績を振り返り真実の歴史を見直してみたい。

２．小栗の出自

先祖は三河出身で家康の祖父の時代からの家臣であった。初めは家康と同じ松平姓を名乗ったが三代目の吉忠より祖母方の小栗に改めた。四代目の忠政は家康の近習で、元亀元年（１５７０）姉川の戦いで家康の窮地を得意の槍で救った。その後の戦においても常に一番槍を入れ「又も一番か」ということで家康から「又一」の名を賜り、代々勇猛を誇りとし「又一」と名乗った。

小栗忠順は１２代目で文政１０年(１８２７)神田駿河台に生まれる。幼名は剛太郎、父忠高は母邦子の婿養子で石高２５００石の旗本、新潟奉行として単身赴任していた。屋敷内には安積艮斎（あさかごんさい）の塾があり小栗は８歳の時から通った。艮斎は儒学者で進歩的な思想を持ち、後に昌平黌教授になった。門人には栗本鋤雲（じょうん）、岩崎弥太郎、川路聖謨、福地桜痴（おうち）、高杉晋作など幕府派、討幕派問わず錚々たる人物がいた。

少年時代の小栗は活発で意地っ張り、長じては現実主義者、剛直の人である。剣術は直心影流免許皆伝、柔術、馬術、弓術、砲術などあらゆる武術に秀でていた。父が安政２年(１８５５)死亡すると跡目を継いだ。安政６年(１８５９)豊後守に、文久２年（１８６２）からは上野介となる。渡米の功績により２００石を加増。妻道子は播州林田藩１万石の藩主の娘である。小栗は渡米前まだ子がなく、お家断絶を防ぐため、母邦子の弟の娘、鉞子（よきこ）を養女に迎え、その婿養子として又一（忠道）を迎えた。

３．遣米使節として渡航

幕府は「日米修好通商条約」批准書交換のため使節団をアメリカに派遣することになった。批准書交換をワシントンで行いアメリカの進んだ産業技術や制度を視察したいという幕府の要望にアメリカが応じてくれたもので、当初は岩瀬忠震（ただなり）、水野忠徳、永井尚志（なおゆき）が行く予定が将軍継嗣問題などで失脚し、代役だった。小栗はその使節団の目付に抜擢される。抜擢理由は頭脳明晰な財政通が評価された。目付とは帰国後、将軍に各々の仕事ぶりを報告する任である。正使新見（しんみ）正興、副使村垣範正に次ぐ第３のポジションである。正使、副使、目付にそれぞれ従者がつく、そのほか医師、通訳、諸国の藩士たちも乗り込み総勢７７名となった。

万延元年（１８６０）１月、アメリカ艦船ポーハタン号２４１５トンに乗り込むとタットナル提督以下３１２名の海軍兵が敬礼し歓迎してくれた。この派遣は日本の開国、近代化に向けての幕開けであった。その後も幕府は最後、慶応３年（１８６７）の徳川昭武一行のパリ万博の派遣までの７年間で１０回ほど欧米に使節団や留学生を派遣している。彼らはどの国の訪問者よりも好奇心旺盛、研究熱心で理解力の高さを激賞された。

特記すべきは幕府の上海行きの貿易船に薩摩の五代友厚、長州の高杉晋作が紛れ込んで密航し、それを機に文久３年（１８６３）長州の井上馨、伊藤博文始め５人の密留学生を、慶応元年(１８６５)には薩摩の森有礼（ありのり）ら１５人の密留学生をイギリスに送っている。外国人を殺傷したり外国船を砲撃する一方、蔭では留学生を派遣し、密貿易を行う、攘夷は幕府を窮地に墜すための「お題目」であった。

このポーハタン号に護衛の目的で随行したのが咸臨丸で、幕府は長崎で開設した海軍伝習所の成果を確認したかった。勝海舟は第一期生で、艦長を命ぜられた。軍艦奉行は木村喜毅（よしたけ）、ジョン万次郎、福沢諭吉ら９６名が乗り込み、助っ人として米海軍ブルック大尉以下１１名が乗り込んだ。咸臨丸はオランダ製の６００トン前後の船である。のちに海舟は「日本人だけで初めて太平洋を渡った快挙だ」と語っているが実際は、しけ続きで仕事が出来たのはジョン万次郎、小野友五郎だけであったという。

ポーハタン号は３月９日ハワイを経由してサンフランシスコに到着する。米艦だけでなく停泊していた英、仏、露などの船も祝砲を放ち日の丸を掲げ日本の開国を祝ってくれた。使節を一目見ようと黒山の人だかりだった。咸臨丸はここで別れ５名の米水兵を雇い日本に引き返す。小栗ら一行はパナマを目指す。パナマは当時スペイン領でそこから鉄道で大西洋に出る。この時小栗はこの鉄道はアメリカ商人たちが発起人の呼びかけでお金を出し合って作ったもので、あがった利益は出資金の額に応じて配当する株式会社手法を知らされた。４時間ほどでアスペンウォールにつき迎えの船でワシントンを目指した。

ワシントンでも熱烈な歓迎だった。米の新聞は小栗を「小柄だが威厳と知性を備えた表情豊かな紳士である」と評した。３使はホワイトハウスで第１５代大統領ジェームスブキャナンに条約批准書を手渡した。その後、彼らはワシントンの海軍造船所を見学する。溶鉱炉、反射炉、スチームハンマーを備えた大工場に衝撃を受ける。大砲、小銃、弾薬などすべての部品は蒸気機関を動力として造られていた。

つぎに小栗たちが向かったのはフィラデルヒァだ。小栗は渡米前、ある密命を受けていた。それは日米修好通商条約に記載された貨幣の「同種同量交換」の不公平を訴えることだった。つまり銀で出来たメキシコの１ドルは、日本の１分銀の３倍の重さがあるので「１ドル銀＝３分銀」で交換出来る。この方式で行くと、外国から日本に４ドル銀を持ってくると１２分銀に換えられ、日本では３両小判に換えられる。それを外国へ持ち出すと１２ドル銀に換えられる。日本を通過するだけで３倍の利益になる。

幕府は１分銀は金の代用でこの交換には否を唱えるが、米領事ハリスと英公使オールコックは理解はしたが強引に結んだ。この結果、１分銀を手に入れようと外国人が押し寄せ、小判に替えられ多量の金が海外に流失した。その結果、日本の金の価値はアメリカの金の３分の１ということになった。ハリスは日本で大儲けして莫大な資産を築いた。

フィラデルヒァに着いた小栗一行は造幣局に向かう。ここでは金貨や銀貨を鋳造したり成分の鑑定や分析も行っていた。小栗は日、米の金貨の分析を依頼した。粘り強く結果を待つと金の含有量は両国ともほぼ同じという結果が出た。小栗は米政府の国務長官、カスに「日本の金貨をアメリカ人が３分の１で入手できているのは不公平ではないか」と主張するが、カスは国益を優先して無視した。小栗はこれ以上の交渉は任されておらず打ち切りとなった。この交渉に対し小栗の主張すべきことは、はっきりいう、アメリカに対して初めてＮＯといった日本人である。

結論は、幕府は使節一行が米に向かった後、１枚当たりの小判を鋳なおして３分の１とした質の悪い万延小判を発行して凌いだ。これは幕府が一番とりたくない政策だった。これは物価上昇を招き、庶民は困窮する。打ち壊し、百姓一揆、攘夷運動の激化につながる。

帰りはニュヨークから喜望峰をまわって、米海軍最新鋭のナイアガラ号に乗って帰国の途につく。アフリカ西岸アンゴラに立ち寄った時のこと、鎖で繋がれた黒人奴隷に衝撃をうけた。香港ではかっての大国、清のアヘン戦争後の惨状を見て身につまされる。

４．帰国後の小栗忠順

使節団一行が帰国したのは万延元年（１８６０）９月27日だった。小栗を抜擢した井伊直弼は暗殺され、攘夷熱が盛んで外国人暗殺テロが横行、幕府の威信は失墜していた。

小栗は同年１１月、外国奉行に任ぜられる。翌月、ハリスの通詞ヒュースケンが薩摩藩士に襲われ死亡。翌年には英公使館東禅寺が水戸浪士に襲われ２人が負傷、小栗は犯人逮捕や賠償金の支払いなどの対応におわれる

文久元年（１８６１）ロシアの軍艦、ポサドニック号が対馬を占拠し軍事施設や砲台をつくる事件がおこる。小栗は視察を命じられ、対馬に急行し艦長ビリレフに対し「占拠は条約に違法する」と即時退去を要求するが武力を背景に乱暴狼藉を働く。小栗は一旦江戸に戻り幕府に対馬の上知を上申するが聞き入れられず外国奉行を辞任した。通説ではロシアの極東進出を恐れた英艦隊が露軍艦を追い払ったとされている。しかし異説として幕府は函館奉行、村垣範正が露領事ゴシケヴィチに粘り強く４回にわたって退去を要求る一方、江戸の外交団から「占拠は５カ国条約に違法すると」の非難により露本国政府の退去命令により退去したのである。露軍艦が英艦隊に恐れをなして逃げ去ったのではないとされる。

その後も小栗は幕府の要職の任命、罷免を何回も繰り返す。これは小栗が慶喜であろうが老中であろうが誰に対しても自分の意見を主張したためである。何度罷免されても、小栗のような先見性を備えた経済通は他にいなかったため再任された。勘定奉行、町奉行、歩兵奉行、陸軍奉行、軍艦奉行、海軍奉行を多くは兼任して勤めた。とくに勘定奉行は４回と多く、最後は、勘定奉行、海軍奉行並、陸軍奉行並を兼任した。

５．フランスの援助による近代化

近代化による強い国家になるには先進国の指導が必要と考えた小栗は、その相手国としてまずアメリ

カを考えたが、アメリカは南北戦争の最中であり、オランダはかっての隆盛は今はなく、欧州の１小国にすぎない。ロシアは対馬占拠のことがある。イギリスは当時、世界一の大帝国であったが最も非人道的とされるアヘン戦争を起こした獰猛な国であった。残ったのがフランスである。

仏は当時ナポレオン３世の帝政で、英に並ぶ国力を有していたが東方進出は少し遅れていた。元治元年（１８６４）３月対日貿易拡大の使命を帯びた仏公使ロッシュが着任した。小栗は親友、栗本鋤雲を介してロッシュと親交を深めた。栗本は函館奉行時代仏宣教師カションからフランス語を学び幕府で一番フランスの事情に詳しかった。当時ヨーロッパの養蚕地帯は蚕の微粒子病がはやり仏も壊滅的被害を受けており日本の良質な蚕種や生糸を求めていた。また幕府はアメリカから買った翔鶴丸の修理を仏の軍艦ケリエール号に頼んだことがあるが、その時の仕事が完璧で良心的であった。小栗は技術援助相手国にフランスを選んだ。

(1) 横須賀製鉄所

小栗が栗本に製鉄所の建設を相談する以前、幕府は長崎でオランダ人技術者による造船所を文久元年（１８６１）に建設していた。蒸気機関を動力とする日本初の工場となるが修船能力は限定され、横須賀製鉄所の設立を決めた幕府は中止命令を出す。

一方佐賀藩では洋式反射炉を建設して大砲を作るなど先進的事業に取り組み、その後、造船も考えて機械の買い入れもしていたが、技術が及ばず幕府に献納され横浜に運んでそのままになっていた。小栗はその機械で船が出来ないかロッシュに相談すると、とても駄目でそれは船の修理に使えばということで横浜製鉄所を造ることになり、慶応元年（１８６５）竣工する。

蒸気船の建造は薩摩藩、水戸藩、仙台藩などでも進められていた。幕府による蒸気船の建造は嘉永７年（１８５４）浦賀奉行与力中島三郎助らが作った軍艦「鳳凰丸」、咸臨丸でアメリカに渡った小野友五郎、肥田浜五郎が帰国後すぐ建造を申し出て、文久３年（１８６３）石川島で完成した「千代田形」がある。これは小ぶりながら耐久性に優れていたが量産されなかった。

小栗の思い描いたのはワシントンで見た大規模な造船所だった。造船所建造を幕府に上申する。幕府の危機的状況の中、当然ではあるが反対の意見が続出する。小栗は「幕府の運命に限りがあろうとも日本の未来には限りがない」と説得した。幕府は元治元年（１８６４）許可を下す。小栗はロッシュや栗本と江戸湾を巡り、横須賀を最適地とした。建設の責任者としてロッシュは上海に赴任していたヴェルニーを選んだ。ヴェルニーは若い海軍のエリート技師だった。慶応元年（１８６５）日仏の協議により「製鉄所約定書」が締結される。ヴェルニーの見積額は驚くほど安く、当時、蘭や英で買い入れる艦船の３隻分にあたる240万ドルであった。慶応元年（１８６５）９月２７日鍬入れが行われた。

ヴェルニーは一旦、フランスに帰り優れた技師や職工を集め機械の購入にあたる。幕府も外国奉行柴田剛中を派遣してヴェルニーの協力のもと機械を買い入れた。ヴェルニーは技師や職工など52名を連れて再来日した。職場内ではヴェルニーの構想により日本人の技術者を育てる「黌舎」と呼ばれる高等技術者教育機関が作られ優秀な技術者を生み出した。ここで学んだ生徒たちは製鉄所の技師だけでなく各界でも活躍した。横須賀は日本産業革命の地となった。

製鉄所は明治政府に引き継がれ完成したのは小栗の死後の明治４年（１８７１）のことであり造船所と改められた。富岡製糸場や日本初の洋式灯台もこの横須賀製鉄所の設計者と技術者によって築かれた。日本近代化の礎となったのである。アジア最大の近代工場はその後、海軍工廠となり、敗戦後は米国海軍基地となった。日本初の石造りのドライドックは現在も在日米海軍横須賀基地内で稼働している。

(2) フランス語伝習所

小栗は栗本と共にロッシュに仏教師による仏語伝習所の設立を申し出る。フランス語のほかにも英語世界史、地理、数学、幾何なども教える学校で元治２年(１８６５)３月開校、小栗の養子又一、川路聖謨や緒方洪庵、栗本鋤雲の息子、旗本、御家人の子弟が学んだ。第１回の卒業生は４７名であり、優秀な人材を輩出したが、明治になり廃校となった。

(3) 軍制改革

幕府はペリーの来航後、講武所を開設し訓練を始めたが、英、蘭の兵制の見よう見まねであった。小栗と栗本はロッシュにフランスから陸軍の軍事指導者の派遣を申し出る。慶応２年（１８６６）８月、仏との契約が結ばれ、翌年１月、団長シャノワン大尉以下１５名の仏軍教官が来日、軍事訓練が始まる。言葉はすべて仏語、服装も装備もすべて仏式であった。伝習生の中に小栗の養子又一、函館戦争で戦った大鳥圭介、小栗の知行地、上野国権田村出身の農民もいた。この取り組みは功を奏したが何分にも遅すぎた。１年後には戊辰戦争が始まる。仏教官らは条約により中立を命じられていたが、ブリュネー以下10名は函館まで行って幕府軍を指揮した。明治政府の帝国陸軍の基礎はフランスの軍事顧問団によるところが大きい。

６．小栗による近代化

(1)滝野川火薬製造所および反射炉の建設

幕府はペリー来航以来、本格的に大砲を造ろうと湯島などに鋳造所を設けていたが、材質は銅であり粗悪なものにすぎなかった。元治元年（１８６４）小栗は大小砲の鋳造を命じられる。小栗は技術者を新進気鋭な武田斐三郎（あやさぶろう）、友平栄を使い、場所も滝野川に変えて反射炉を新設し、鋳造に取り掛かろうとしたが、千川用水路の拡張工事の問題などで、なかなかはかどらなかった。完成は慶応３年（１８６７）５月となった。こうして完成した滝野川の設備は明治政府に引き継がれ、兵器や製紙などの近代工業の基礎となった。

(2)株式会社「兵庫商社」

日本で初めての株式会社の原型である。兵庫港は条約により文久２年（１８６２）から開港の予定であったが、孝明天皇の勅許がおりず、開港となったのは大政奉還後の慶応３年（１８６７）１２月である。その半年前、小栗は開港に当たって横浜のように小資本の日本人商人が外国人商人に貿易上の利益を独占されないように、大坂商人の団結をはかる。それは渡米のおりのパナマ鉄道の資金調達方法である。大坂の有力な商人20人を選んで資本を出させ、その際は１００万両の金札を発行させる。商人組合を作り、定款を定め株主を募る。貿易で出た利益は出資額に応じて配当する。株主は広く町人や武士などからも募る。貿易の拡大を図り、軌道にのれば利益によりガス灯、郵便、電信、鉄道の設置も構想していた。慶応３年（１８６７）４月「兵庫商社」の創設を幕府に上申する。６月許可を得て革新的な財政政策で活動を始めたが、これも遅きに失した。幕府崩壊とともに半年で解散した。小栗の構想は三井の大番頭、三野村利左衛門による「通商会社」「為替会社」に引き継がれた。

（３）築地ホテル

日本人による初めての本格的洋式ホテルである。小栗がイギリス公使パークスの要望によって株式会社手法で、慶応３年（１８６７）清水喜助の請負により建設された。完成は小栗の死後の明治元年８月となる。「エドホテル」と呼ばれ連日大勢の見物人が訪れ評判は良かったが、完成後３年半で焼失する。

（4）小布施の船会社

小布施の豪商、高井鴻山は幕府の御用金の求めに応じ慶応２年と３年で計一万両の献金を申し出た。慶応３年（１８６７）８月小栗の示唆により北信越の豪農、豪商たちに資本を出させ船会社を興し海外との貿易によって国を富ませる「船会社設立案」を松代藩に上申した。これも小栗の株式会社構想によるものだが、遅きに失した。幕府崩壊により鴻山と小栗の夢は水泡に帰した。

７．フランスからの資金調達と挫折

幕府の財政は３度にわたる将軍の上洛費用、薩摩の生麦事件や長州の外国船砲撃事件の多額の賠償金、使節や留学生の派遣費用、長州征伐の軍資金、横須賀製鉄所の建設費、軍艦や武器の購入費用など火の車であった。そんな中、勘定奉行になった小栗は対策に追われる。江戸の有力商人や諸国寺社に対し御用金を課したり、古い金貨、銀貨を鋳なおして出目をとる。旗本からも兵役を金でおさめるよう軍資金を課したが、とても賄える額ではなかった。

慶応２年（１８６６）５月フランスから帝国郵船会社代表、クーレが来日した。小栗はロッシュを介して幕府の歳入の約１年分にあたる６００万ドルの借款を申し出た。借款契約は８月 20 日に結ばれると小栗はフランスに莫大な武器、軍艦を発注した。

しかし、借款契約は慶応３年（１８６７）７月突如、破棄される。英公使パークスの「自由貿易を唱える通商条約は幕府寄りのフランスは違反する」との訴えによるものだった。当時ナポレオン三世の帝政は翳りを見せ、イギリスとの協調路線を取らざるを得ず、ロッシュも幕府寄りを改めざるを得なかった。小栗は旗本に知行高物成半減上納制を取り入れ徳川再興の望みをかけたが、幕府は崩壊し望みは潰えた。

８．近代化を阻止した勢力

（1）朝廷、孝明天皇

朝廷内には世界情勢を理解するものなどおらず、孝明天皇も日米修好通商条約には「たとえ戦になっても否」と誰の諫言も受けられなかった。文久３年（１８６３）８月 18 日の政変以降は過激討幕派の公卿や長州藩士などを追放され幕府との協調路線を目指されたが、攘夷の方針は変わらなかった。幕府は振り回され窮地に陥る。天皇の死後、討幕派に立場を置き換えた岩倉具視などが舞い戻り宮中は討幕派主導となる。１５歳の明治天皇を操り討幕が実行される。

（2）薩摩藩

薩摩の島津久光は文久 2 年（１８６２）江戸からの帰りの道中、行列の前を横切ったイギリス人を殺害、生麦事件である。イギリスは幕府に 40 万ドル、薩摩に 10 万ドルと犯人逮捕を要求するが薩摩は応じない。小栗は一人、条約を踏みにじった薩摩を非難し、兵を差し向け討伐すべし、賠償金の支払いにも異を唱えた。

文久３年（１８６３）幕府からの賠償金を積んだ英艦隊７隻が薩摩を砲撃する。薩摩の町の一割は焼き尽くされたがイギリス側も多大な損害を出した。薩摩は幕府から１０万ドルを借り賠償金を支払ったが返さなかった。イギリスは幕府を見限り、勇敢に戦いしたたかな講和交渉をする薩摩を評価し結びつく。イギリスはその後、軍艦、武器援助もし軍制改革など薩摩の近代化を助けた。慶応２年（１８６６）犬猿の仲であった長州と盟約を結び、西郷隆盛、大久保利通らの陰謀により討幕を行った。

（3）長州藩

京都で激しい尊王攘夷を唱えテロを行っていたのは主に長州人であった。天皇が文久３年（１８６３）攘夷決行を定められるとすぐ下関を航行する米、仏、蘭の船を砲撃した。8月18日の政変が起こり京から長州藩士と長州派の公卿が追われ、平穏を取り戻したかに見えたが、翌年、長州過激派はまたまた京に戻りこんどは「蛤御門の変」を起こす。この時、薩摩藩は会津藩に加勢し長州軍は敗退、天皇より「朝敵」として追討される「第１次長州征伐」である。同年８月、英仏米蘭４か国連合艦隊による下関報復攻撃が起きる。長州は砲台を壊され壊滅的被害を受ける。幕府はこの時長州が犯した罪に300万ドルの賠償金を払うことになる。諸外国は兵庫開港をするなら賠償金を免除するとしたが朝廷の反対によってそうはならなかった。諸外国は幕府の力を疑う。「第１次長州征伐」は幕府は寛大な措置で許したが慶応元年（１８６５）長州は高杉晋作らが奇兵隊などを率いて幕府に対抗した。翌年「第２次長州征伐」開戦となる。今度は薩摩と手を組み、薩摩の名を借りてグラバー商会から莫大な軍艦や最新式兵器を購入、幕府不利のもと休戦となる。

（４）徳川慶喜、松平春嶽、勝海舟

いずれの人物も評価が分かれるところである。慶喜は英邁と評されさわやかな弁舌で人を引き付けるが皇室尊崇の念が強く朝廷に阿り攘夷を唱えるなど一貫性に欠ける。優柔不断で、肝心なところで腰が砕ける。春嶽は四賢侯の一人と言われるが状況次第で立場をコロコロ変えるご都合主義、雄藩連合を結び幕府の失墜に加担した。勝海舟は幕府側にも拘わらず薩長と近い関係があり幕府の内事は勝により薩長に漏れた。フランスとの提携や製鉄所建設に反対、自己宣伝が多く忠誠心に欠けた。

９．小栗罪なくして斬らる

慶応４年（１８６８）鳥羽伏見の戦に敗れ家臣を見捨て江戸に帰還した慶喜に対し、小栗は徹底抗戦を主張する。幕府には新鋭戦艦「開陽丸」をはじめとする軍艦８隻、運送船７隻あり、フランス式陸軍も健在だ。西軍を駿河湾にて砲撃すれば勝算は十分あった。しかし恭順した慶喜より「お役御免」を申し付けられた。小栗は知行地である上野国群馬郡権田村に引退を決めた。

小栗が江戸を立ったのは同年の２月28日、同行したのは母、妻、養子や養女のほか家臣や小栗歩兵ら37名であった。３月１日、当分の間宿とする東善寺に到着する。当時、小栗が幕府再興の軍資金を権田村に持ち込んだという根も葉もない噂があった。翌日、博徒十数名が、権田村周辺の４つの村々に「世直しの為、小栗を成敗する。軍用金を奪ったら分けてやる。鉄砲を持って必ず参加せよ。加わらないと火をつけて焼け払う」と脅しをかけた。翌々日、武器を持った博徒や村民２千人ばかりが襲ってきた。たちまち銃撃戦になったが、相手は烏合の衆、こちらはフランス仕込みの小栗歩兵でたちまち暴徒を制した。暴徒に与した４カ村の代表が謝罪に来た。小栗は快く受け入れ「これから東善寺で学校を開くから村の若者も学びに来るがよい」と伝えた。教育により新しい人材育成を目指していた。

小栗はその後住居建設現場、観音山を訪れたり、用水路を造ったり、畑を開墾したり穏やかな日々を送っていたが、突然、高崎、安中、吉井の３藩から使者が訪れた。東山道鎮撫総督府総督、岩倉具定(17歳)、参謀、板垣退助の命令によって小栗を捕らえに来たのだ。罪状は、武装蜂起して反逆を企てているとのことであった。小栗はそんな事実はないことを申し開き、証拠として旧式の大砲を差出し養子の又一を同行させた。

３藩の使者は総督府に検分の結果、小栗に反逆の疑いなしと報告すると、軍監である長州の原保太郎（２２歳）と土佐の豊永貫一郎（１６歳）は激怒して、そんなことはないすぐ捕らえてくるよう脅した。軍

監２人は３藩の兵を引きつれ東禅寺にいた小栗を連行した。閏４月６日、小栗ら主従４人は何の取り調べもないまま烏川（からすがわ）の河原に引きずり出され斬首された。享年42歳であった。

翌日、高崎藩に出向いて捕らえられた又一も家来３人と共に牢屋の前で斬首された。小栗主従の処刑が終わると総督府は小栗の所有していたもの全てを売り払い軍資金として持ち去った。小栗の母邦子と身重の妻道子、養女鉞子は歩兵に守られ苦難の末会津に落ち延び、無事女の子を出産した。その後静岡を経て東京に帰り三野村利左門の援助をえた。小栗の血は受け継がれたのだ。(「覚悟の人」「小栗上野介」などの要約)

１０．おわりに

小栗の最後は無念の一語に尽きるが、彼が進めた事業や構想は明治政府に引き継がれ日本の近代化に役立った。しかし、高校教科書から小栗上野介の名は見られない。横須賀製鉄所の名は１社のみ山川出版「新日本史Ｂ」が「幕府はフランス人技師の指導の下、横須賀造船所を建設するなど軍事力の強化をはかった」と記しているが、小栗の名もヴェルニーの名もない。

遣米使節については、ほとんどの教科書は、条約批准のために使節を派遣した船に付き添った咸臨丸が主語で艦長、勝海舟の名と咸臨丸の絵が載っている。近世以降の歴史を扱った山川出版「現代の日本史Ａ」はワシントン造船所で撮られた使節団の集合写真を載せているが、正使新見正興の名のみで小栗の名はない。

それに代わって横須賀製鉄所の技術で作られた、世界遺産の富岡製糸場、遣米使節団に代わって岩倉使節団を大きく取り上げている。小栗上野介も徳川の近代化もないものとされ歴史から消された。

福沢諭吉は明治34年１月小栗に「鞠躬尽瘁（きっきゅうじんすい）」(慎重に事に当たり身命をなげうって奉公する)という賛辞を贈って世を去った。

東郷平八郎は日露戦争後の明治45年突如、小栗の子孫を招き「日露開戦の勝利は横須賀海軍工廠に負うところが大であった」と感謝の意を表した。

大隈重信も「明治政府の近代化の殆どは小栗の模倣だった」と述べた。

司馬遼太郎も小栗を「日本近代工業の源泉」「明治の父」と評している。

福地桜痴は「幕末数年間の命脈を支えたのは小栗の財政手腕によるところが大きい」と述べた。

犬養毅は「近代の人々の伝記は勤王諸藩に属した人々はたとえ暗殺者であっても功績を歴史にとどめているが、幕府に属した人々は大きな功績をあげてもそれを伝える書物はまれである」と述べている。本当にその通りで明治政府の薩長史観は現代も改まることなく続いているのである。例えば平成２７年（２０１５）に登録された世界遺産「明治日本の産業革命遺産」は殆どが山口県や鹿児島県で占められており横須賀造船所や横須賀市は含まれていない。

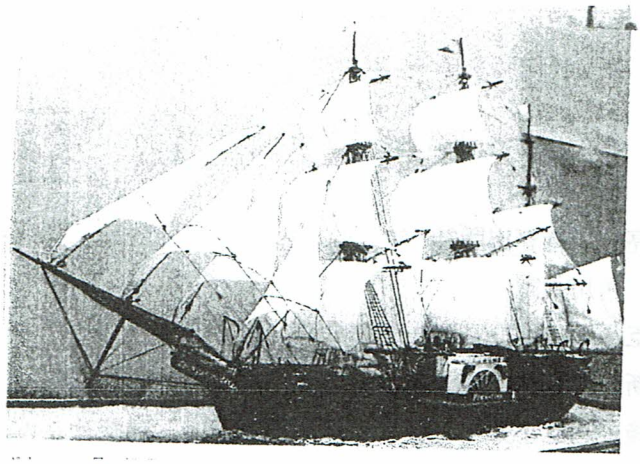
列強の脅威、攘夷運動や討幕の嵐が迫る激動期、国難を乗り越え徳川の枠を乗り越え日本の近代化に邁進した小栗の功績はもっと評価されてもいいと思う。

参考図書

「幕臣たちの誤算」星亮一　青春出版社
「覚悟の人」佐藤雅美　角川文庫
「忘れられた悲劇の幕臣小栗上野介」村上泰賢　平凡社
「小栗上野介と幕末維新」高橋敏　岩波新書
「兵庫商社を創った最後の幕臣小栗上野介の生涯」坂本藤良　講談社
「官賊と幕臣たち」原田伊織　毎日ワンズ
「幕末維新を動かした８人の外国人」小島英記　東洋経済新報社
「小栗忠順のすべて」村上泰賢　新人物往来社
「開国の先覚者　小栗上野介」蜷川新　批評社
「遣米使節と露英対決編」徳富蘇峰　講談社学術文庫
「レンズが撮らえた幕末の日本」岩下哲典　塚越俊志　山川出版社
「最後の幕臣　小栗上野介」中公文庫　星亮一
「幕末開明の人　小栗上野介」村上泰賢　市川光一　東善寺
「消された『徳川近代』明治日本の欺瞞」　原田伊織　小学館
「氷川清話　勝海舟」江藤淳　松浦玲編　講談社
「明治維新と日本人」芳賀徹　講談社学術文庫
「幕末維新グラフティー１５０人の群像』別冊歴史読本　新人物往来社
「幕末維新に学ぶ現在」山内昌之　中央公論者
「万波を翔る」木内昇　日経新聞社
「幕末遣外使節団物語　夷狄の国へ」尾佐竹猛　講談社
「幕末史」半藤一利　新潮社
「小栗上野介と横須賀」山本詔一　横須賀市文化スポーツ観光部文化振興課
「ヴェルニー記念館」パンフレット
「日本史Ｂ新訂版」実務出版、「新日本史Ｂ改訂版」山川出版社、「高校日本史Ｂ改訂版」山川出版社
「新選日本史Ｂ」東京書籍、「高校日本史Ｂ」実教出版、「高等学校日本史Ｂ」清水書院
「現代の日本史Ａ」山川出版社

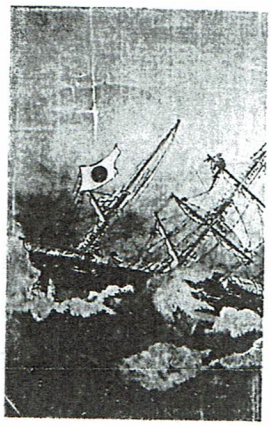
小栗上野介

（幕末維新グラフティー150人の群像より）



ポーハタン号模型

（東善寺蔵パンフレットより）

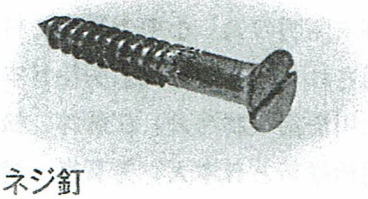


咸臨丸絵図

（現代の日本史Aより）

ワシントン海軍造船見学の記念写真.前列右から2人目が小栗

（現代の日本史Aより）



ネジ釘

「こういうものをどんどん造れる国にしたい」と造船所から持ち帰り配った。

（東善寺パンフレットより）

小栗の盟友栗本鋤雲

（横須賀市発行小冊子より）

フランス公使ロッシュ

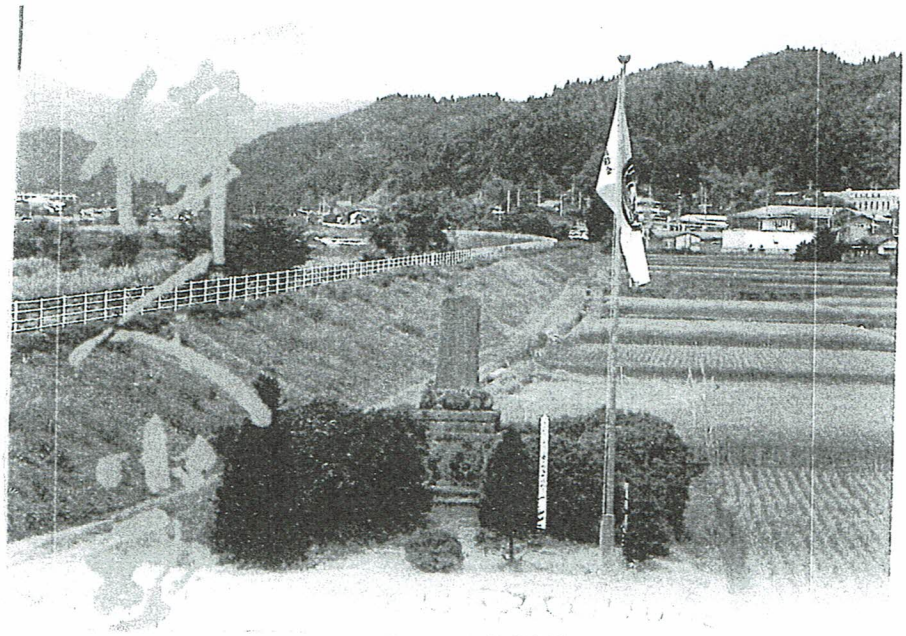
（幕末維新グラフティー150人の群像より）

ヴェルニー

（横須賀市発行小冊子より）

ヴェルニー公園より米軍横須賀基地を望む
ドックが今も使われている.

小栗歩兵 左端が小栗又一
フランス式訓練を受けた
(東善寺発行 小栗上野介より)



「偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らる」の顕彰慰霊碑
左側に烏川が流れる.(東善寺パンフレットより)